

今の日光川が木曽川の本流であった頃、安土桃山時代から江戸時代へと移る頃的美濃路の渡し跡です。萩原町にある天神社と対岸の西萩原にある天神神社は渡し舟の発着場でしたし、この渡しの辺りは古川、萩原川ともいわれ、川幅は数百メートルとかなり広がったようです。尚、織田信長が初めて斎藤道三と富田の聖徳寺で会見した帰り、道三がこの渡しまで見送ったとも伝えられています。

天正14年（1586年）の大洪水以降、主要流路が現在のように起の方に移り、萩原川は川幅も狭まって板橋となり、渡しも起側に移りました。その間の経緯は、起宿本陣加藤家文書中の天正19年と推定される豊臣秀吉四奉行からの『萩原船頭給継目証文』等によって知られます。

江戸時代には、東海道と中山道とを結ぶ脇往還として美濃路は繁栄し、萩原宿や起宿も賑わいを見せ、徳川家康が関ヶ原の戦いから凱旋して通ったので、御吉例街道ともいわれています。



萩原町・天神社の天神の渡し跡の石碑



萩原町・天神社



西萩原・天神神社の天神の渡し跡の石碑と案内板



西萩原・天神神社

◀一宮の史跡散歩▶

野府城跡・吉藤城跡

一宮市立開明小学校は野府城（のぶじょう）という城跡に建っています。城主は織田信秀の五男で、織田信長の弟にあたる織田九朗信治という武将です。兄である織田信長に従い、野府城主となったといわれています。

元亀元年（1570年）織田家は近江（滋賀県）の浅井氏、越前（福井県）の朝倉氏と戦っていました。現在の滋賀県大津市に織田軍の宇佐山（うさやま）城があり、森可成とい

う武将が守っていたのですが、そこに浅井・朝倉連合軍が攻めてきたので織田信治は軍勢を率いて宇佐山城に入り、浅井・朝倉連合軍と戦いましたが、26歳という若さで討ち死にをしてしまいました。その後信長の家臣津田元嘉が城主となりました。

正門付近に石碑と案内板が建てられています。また近くにある雲閑寺の山門は、城門の一部を使って建てられたといわれています。



野府城址の石碑・案内板

吉藤城は織田信長の次男・織田信雄の家臣である遠藤三郎右衛門の居城として知られています。尚、妙興寺文書によると、嘉吉3年（1443年）にこの地で遠藤三郎宗次が開発代官を務めたという記述がある事から、この人が遠藤三郎右衛門の先祖で、この頃からすでに遠藤一族はこの地に住んでいたと思われます。

その後、遠藤三郎右衛門は美濃に移ったようですが、天正12年（1584年）に起きた「小牧・長久手の戦い」では、織田長益（有楽斎）・滝川雄利・飯田半兵衛らが入城して守備を強化しました。一宮市明地字南古城在の城址跡は現在水田になっていますが、その一角に城址跡の石碑と案内板が建てられています。



吉藤城跡の石碑・案内板

馬見塚遺跡は縄文後期から弥生、古墳時代に至る複合遺跡とのことです。遺跡の規模からしたら、他の大遺跡に比べられるようなものではありませんが、木曽川の氾濫原というこのような場所から遺跡が見つかるなど、以前の定説では考えられなかったもので、発見された時には、ちょっとしたセンセーションを巻き起こしたそうです。

昭和48年の調査では、東西400m、南北300mの範囲の縄文、弥生、古墳時代にまたがる大きな集落遺跡だと確認されました。

馬見塚の由来は、『真清探當證』によれば、西暦472年、名馬を皇太子に献上する時に、馬を見聞された場所であったとされています。尚、馬見塚遺跡自体はこの伝説とは何の関係もないようです。

馬見塚遺跡を訪れても、現地には遺跡の石碑と案内板があるだけで、歴史を感じさせるものは少しもありません。馬見塚遺跡の出土品は妙興寺隣にある一宮市博物館に常設展示されていますので、馬見塚遺跡に興味のある方は、是非一宮市博物館を訪問してください。

また、『一宮市馬見塚遺跡における立地と遺跡形成についての覚書（愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第13号 2012.5）』という調査資料には、「一宮市馬見塚遺跡は、尾張低地帯に立地する遺跡として、学史的にも知られた著名な遺跡である。当地域の縄文時代後晩期の遺跡が散発的な状況を示す中、馬見塚遺跡では、遺構・遺物の出土など遺物包含層の様相が群を抜いて濃密であり、この遺跡の様相の解明および評価は、当地域の縄文時代後晩期を語る上で必須である」と記されています。



馬見塚遺跡の石碑と案内板